

読者のページ

都市環境下の 子どもの遊び

衛生局 滝沢輝雄

子どもの遊びを親のノスタルジアとしてとらえるなら「確かに今の子どもはかわいそう」ということになる。メソ、ベーゴマ遊びから他のグループのなわ張りやまで出かけたときの胸さわぎ、柿ドロボーをしてとなり散らされ逃げまわったこと等、自由奔放な遊びに比べ、今の子どもが妙に大人びていて、悟り切ったような顔をされたとき、親はとまどい不安を感じるのである。

子どもは遊び、親が家について、何かあったらすぐに家にとび込める安心感と、遊んできて大丈夫だという保障に加え、遊び仲間がいて初めてきつかけができて、残念ながら現在の都市環境は、交通事故、非行化等の危険があらうし、家庭環境も親達が叶えられなかった中流指向の夢をピアノや塾通いに熱中したり、共稼家庭が増えれば当然に学校帰りの道草など味けないものとなってしまふ。従って子どもの遊びは、親の管理の下に制約され、与えられたものでしかなく、遊びの工夫も、自由で遊んでやろうという気持ちも当然に起らない。

ある剣道師範の話によると子どもに剣道を教えてほしいと入門を願う親の大部分は、子どもに規律ある生活を送らせたいから、子どもをたくましく育てたいというたてまえとはうらはらに、本音は、その時間だけ安心して管理してもらえらるからだという。

都市環境下での子どもの遊びを、行政的にあるいはボランティア活動によって解放するにも実験的な冒険広場や児童公園という制約された機会しかもない。やはり子供の遊びをとりもどすには、悲観的だが学校教育レベルで普遍的に改善していく以外方法はないのだろうか。

「自由を子どもに」の難しさ

市民局 佐々木光枝

調査季報第62号の「都市と子どもの特集を、興味深く読んで」

家庭における子どもの役割を問う直す提案には全く同感である。さらに、都市の子どもだけでなく、まだまだ自然が豊かな山村の子どもでさえ、すでに遊ぶ姿が見うけられないという指摘に、子どもが遊ばなくなったのは、自然破壊が大きな要因と思っていたので、改めて、なぜ子どもたちが遊ばなくなったのか、遊びとは何なのか見直す必要があると痛切に思った。

私事になるが、子どもが生まれたとき、俗に言われている教育ママだけにはなるまい。子どもはのびのびと育てよう」と思った。以後、のびのびと育てているつもりで、内心秘かに抱いていた自負が、いとも簡単に崩れてしまったのは、『幼児の

環境をめぐるリポート』にも引用されている「自由を子どもに」(松田道雄著)を読んだからである。例えとして書かれている、公園で子ども同士がおもちゃの取り合いをすれば、「貸してあげなさい」「そんなことをしちゃだめ」といちいち口をはさむ母親の姿に思わず苦笑してしまった。その姿はとりもなおさず私自身の姿であるからだ。

本著は、親だけでなく、幼稚園、学校さらには社会も子どもを管理しようとしていると指摘している。子どもを自分たちの都合のよい子どもに育てようとする傾向は、私の中にも根強くあるようだ。これは自分が最も嫌っていた、『教育ママ』そのものじゃないか。『教育ママ』

横浜という都市を、その基盤である「地下」についてみると、どういふ事業が行われているのか、何が問題なのかを、特集した。都市の過密化につれて地下の利用も拡大しており、マイナ

が望ましいのだが、これからの

と自覚していない点よけい始末の悪いものだと思った。

かといつて、自由に育てるには、放ったらかしでいいのかわいさはそうではない、自由と放任は全く違うと思う。放任主義は無責任そのものではないだろうか。自由に育てること

は、言葉では易しいが、実際問題、大変むずかしいように思える。

『調査季報』は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。『行政研究』への投稿も歓迎します。二〇〇字詰五〇枚以内。

この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自治体問題等、題材は自由。七〇〇字以内。

論議されるべき問題であろう。

その一つ、上下水道等の地下埋設物管理台帳図や道路台帳図は、それ以外にも土地、建物等さまざまな都市情報を読みとることができ、都市の現況を把握する貴重な基礎資料としても大いに活用することが可能である点が、注目される。(北小路)

「あ」とがき